

②ニューデリー日本人学校 (インド)

シリーズ「世界の日本人学校」の第2回目は、インドにあるニューデリー日本人学校を紹介する。

インドの発展とともに変化



ニューデリー日本人学校
おかばやし やすゆき
校長 **岡林保幸**

50周年に待望の新校舎が完成

国土面積は世界7位、日本の人口の10倍、12億人以上の人口を有する大国インド。その首都がニューデリーであり、約1300万人が住む巨大都市である。これまで多くの日本企業がインドに進出し、市場の開拓に取り組んできた。インド全体では8000人以上の在留邦人がいるが、90%以上が日本企業のビジネスマンとその家族である。そのうちの約半数がニューデリーや近郊のハリヤナ州のグルガオンに住んでいる。

ニューデリー日本人学校は1964年に世界で3番目の日本人学校として誕生し、91年に現在のバサント・クンジ地区へ移転してきた。約250人の児童生徒と70人の幼稚園児(2017年4月現在)が在籍している。しかし、10年ほど前は児童生徒が100人にも満たなかった。その増加ぶりからも、日本企業のインド市場開拓への熱意が感じられる。14年に50周年を迎え、待望の新校舎が完成した。



新校舎

インドで日本の祭りを堪能

デリー日本人会主催の夏祭りが毎年、本校のグラウンドを会場に開催される。中央にやぐらを建て、会場を照らす照明を設置する。来場者が1800人を超えるこの祭りの事務局を日本人学校が担当し、本校の子どもたちをはじめ、多くの方が1年に1回のこの祭りを楽しむ。開会式では、子どもたちが和太鼓の演奏や「よさこいソーラン」の演舞を披露する。また、お囃子の演奏の中、大人の勇壮な神輿と一緒に子ども用のかわいらしい神輿が会場内を巡行する。

子どもたちが楽しみにしているのは、企業や各種活動団体が出店する模擬店での買い物である。焼き鳥、たこ焼き、牛丼、かき氷など。普段、生活の中で買い物をす



夏祭り

る機会の少ない子どもたちは、財布を持ち歩いて友達と一緒にお店を回るだけで楽しくて仕方がない。金魚すくいや輪投げの他に空気で膨らませる大がかりなアトラクションも人気があり、浴衣姿やお面をかぶった子どもたちが楽しそうに遊ぶ。日が落ちる頃、提灯のあかりが灯るやぐらの周りに盆踊りの輪ができあがる。そして、祭りの最後を打ち上げ花火が飾る。インドにしながら日本の祭りを堪能できる1日となる。